

国立天文台 と労働組合

国立天文台 チリ観測所 教授
阪本 成一



専門は、電波天文学と科学コミュニケーション。国立天文台助手・助教授を経て、JAXA 宇宙科学研究所では広報普及担当教授として小惑星探査機「はやぶさ」などに関わる※。現在は、国立天文台に戻り、ALMA の日本分担分観測装置の保守チームのリーダーを務めている。東京大学在学中には、ボート部の主将を務め、学生日本代表にもなった「体育会系天文学者」。

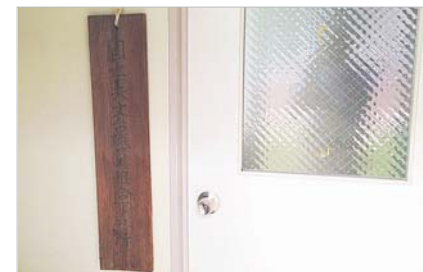
※ 全大教新聞 大学人インタビュー「宇宙へ飛び出すことで地球がわかる」(2010年8月第254号)、
(短縮 URL) <http://goo.gl/1xE5cH> (ダウンロードの際は全大教 HP パスワードの入力が必要です)

はじめに

電 波天文学を専門とする私は、学生・研究員時代から助教授時代まで国立天文台で過ごし、2007年4月から JAXA 宇宙科学研究所で小惑星探査機「はやぶさ」など宇宙科学プロジェクトの広報普及活動に携わりました。縁あって2014年8月に国立天文台に戻り、息つく間もなく今年から国立天文台職員組合の執行委員長を拝命し、戸惑いとともに身の引き締まる思いでいます。

1. 国立天文台職員組合と活動の歴史

広 報普及を手掛けていた関係で業界以外にも大勢知人がいるのですが、私が組合の委員長になったと聞くと、「天文学者」というやや浮世離れた仕事と、給与問題等について戦う「労組の委員長」という二足の草鞋に違和感をもつ方もいらっしゃるようです。しかしながら国立天文台職員組合の歴史は、2004年4月の大学共同利用法人自然科学研究機構の発足や、1988年7月の国



国立天文台三鷹キャンパスの一角にある国立天文台職員組合事務所。国立天文台発足(1988年)に伴い現在の名称に変わって早四半世紀余りが経ち、看板の地の色と墨書が渾然一体となりつつある。固定がタイラップなのが研究所らしさを感じさせる。

立天文台の発足のはるか前、東京大学東京天文台の時代にさかのぼります。手元の資料(国立天文台職員組合ハンドブック 2007年版)によると、東京天文台労働組合が結成されたのは1946年のことです。翌1947年には給料遅配に伴う生活補給金を要求し、1か月分の支給を勝ち取るなどしています。1950年代後半には勤務評定闘争、1960年代には公務員共闘統一活動、1970年代には賃金要求のためのストライキなども行っていたようです。その後、技術系職員の地位向上にも精力的に取り組んできており、私自身は契約職員の待遇改善や職場環境の維持に重点的に取り組んできました。

いまでは自然科学研究機構や国立天文台の執行部との対峙の仕方も、労働者の代表として専門的な意見や代替案を出し、成果を着実に得ていくという「影の内閣」のような役割を果たしています。台長や副台長など国立天文台の執行部にも職員組合の幹部が登用されることがあり、テレビなどでもお馴染みの渡部潤一副台長も最近まで何度も執行委員長を務めてきました。現在の立場こそ違えども、労働者が置かれている状況を理解する人が使用者側にもいるのは何かと心強いことです。

2. 変化する状況との戦い

目の前の大きな問題が解決されるにつれ、かつては高い組織率で推移していた国立天文台職員組合の組織率が下がってきています。メインキャンパスである三鷹以外に岡山、野辺山、水沢、チリに分会が存在し、選挙によって選ばれた執行委員会を軸に連携しながら活動していますが、水沢



第 86 回中央メーデー(2015 年 5 月 1 日)
会場にはためく国立天文台職員組合の旗

ではまだ過半数が組合員であるものの、それ以外の事業所では組合員の高年齢化と新規組合員の獲得に苦戦しており、特に岡山や野辺山ではつい最近になって過半数組合としての位置づけを失いました。周囲を見渡しても、自然科学研究機構の発足に伴い共通の就業規則が導入された 5 つの大学共同利用機関(国立天文台、核融合科学研究所、基礎生物学研究所、生理学研究所、分子科学研究所)のうちで職員組合が活動しているのは国立天文台だけで、就業規則を変更するための機構との交渉も一筋縄ではいかなくなってきました。

とはいえ国立天文台や自然科学研究機構を取り巻く状況はどんどん変わり、新たな課題もどんどん生まれているのも事実です。例えば国立天文台ではプロジェクト制という目的志向の組織体制の下ですばる望遠鏡や ALMA 望遠鏡(後述)、30m 望遠鏡(TMT)をはじめとする大小のプロジェクトを進めています。これを支える職員の役割や雇用・勤務形態も多様化しています。常勤かつ雇用期限のない研究教育職員(教授・准教授・助教)・技術職員・事務職員のほかは基本的に 5 年程度の期限付きの雇用で、勤務時間がフルタイムの人は、管理的な役割の「URA(ユニバーシティー・リサーチ・アドミニ

ストレーター)職員」、特任〇〇という呼称の「年俸制職員」、あるいは「特定契約職員」に分かれ、パートタイムの人は就業規則上は「短時間契約職員」としてひとくくりです。国立天文台以外に雇用されている派遣職員も多く、このような多様な人たちが国立天文台の業務を担っています。私がいる三鷹事業所では、研究教育職員 110 人、技術職員 22 人、事務職員 41 人に対し、URA 職員 7 人、年俸制職員 56 人、特定契約職員 61 人、短時間契約職員 101 人と、働き方は非常に多様で、外国人研究者も大勢います。こういった多彩なメンバーがストレスなく業務に集中できる環境を確保することが、陰で職場環境を預かる者の腕の見せ所だと思っています。

3. ALMA の労働環境

では実際にどのような課題があるのか、私に関わっている ALMA プロジェクトを例にとりてご紹介しましょう。

ALMA は正式名称を「アタカマ大型ミリ波サブミリ波干渉計(Atacama Large Millimeter/submillimeter Array)」といい、チリ共和国北部にあるアタカマ高地(標高約 5000m)に高精度パラボラアンテナ 66 台を展開し、宇宙からの微弱なミリ波・サブミリ波を受信する巨大な電波望遠鏡として運用し、銀河や星・惑星の誕生の謎などの解明を目指しています。総建設予算は約 1000 億円で、国立天文台を中心とした東アジア連合と、アメリカ国立電波天文台を中心とした北アメリカ連合、そしてヨーロッパ南天天文台という 3 極による国際協力プロジェクトとして建設・運用されています。2002 年から着工し、2011 年度には一部の望遠鏡を使った科学観測を開始、そして 2013 年 3 月に開所式を挙行了しました。すばる望遠鏡やハッブル宇宙望遠鏡などの最先端の望遠鏡と比較しても 10 倍程度高い解像度をもつのが特徴の一つで、最近は報道等で取り上げられる機会が増えてきていますのでご存知の方もい

らっしゃるかもしれません。観測者は現地に行く必要はありませんが、日米欧から派遣された国際職員と、チリで雇用された数百人の現地職員が観測所の運用・保守に携わっています。



アタカマ高地で稼働中のALMA望遠鏡。画面右側にある、やや小ぶりながら高精度の7mアンテナ12台と、その周囲にある12mアンテナ4台は、日本が製造を担当した。この時点ではアンテナ群は最もコンパクトな配列になっていたが、それでも空撮でもしない限りALMAのすべてのアンテナを1つの画面に収めることはできない。

まず、天文台勤務の職員の労働環境と聞いて容易に想像がつくのが深夜勤務だと思います。観測運用がある程度定常化すれば当番制を敷くこともできるのですが、初期には高い専門性を持った職員が一定の期間継続して従事する必要もあり、ALMA観測所では標高2900mの山麓施設(山麓とはいえ乗鞍岳の山頂とほぼ同じ)に科学者が交代で滞在して夜間の測定を行っています。

日中には保守作業が行われますが、アンテナの軽微な保守作業や故障対応などは標高5000mの山頂施設で行われます。ここはエベレスト登山のベースキャンプとほぼ同じ標高で、気圧は平地のほぼ半分、気温も平地に比べて30度ほど低く、湿度は20%を下回ります。屋外での日中の作業は、高山病と低温に加え、強烈な紫外線や強風、砂埃との戦いでもあります。ちなみに私にとっては山麓施設滞在中には終業後も禁酒なのが辛いところです。

観測所が人里離れた僻地にあるため、山頂・山麓施設での業務を常とする職員は観測所に泊まり込こんでの連続8日間のシフト勤務が導入されており、生活のリズムを保つのも大変です。オフも移動にかなりの時間が割かれ、ま

た本人がオフシフトの間も業務自体は通常どおり進行していますから、メールなどはどんどんたまっていきます。チリ赴任者の一時帰国についても最近になってようやく制度が整備されたところです。

国際プロジェクトでは時差の問題もあります。日本とチリの時差は12時間で、通常の勤務時間中に双方がリアルタイムに連絡することはできません。したがって、午前中や前半夜がコアタイムとなります。日米欧で幹部がチリを交えて電話会議をすることもあります。日本時間で22:00過ぎから始まるのがほとんどです。また、プロジェクトの公用語は英語ですが、現地人スタッフのなかにはスペイン語しか話せない人も多く、習慣も異なるため、意思疎通も簡単ではありません。国際職員のなかでの日米欧の待遇の違いも顕著で、同僚のなかには合同ALMA観測所の国際職員として100人近いチリ人スタッフの指揮や勤務評定を任されている人もいますが、職責手当は支給されず、同じ職責のヨーロッパ側スタッフとの間で待遇面での大きな隔たりが生じてしまっています。

4. チリのメーデー事情

ところで先日、5月1日をチリ出張中に迎える機会がありましたので、この場をお借りしてチリのメーデー事情についてご紹介しましょう。

チリでは5月1日はDia Nacional del Trabajo(労働者の日)として休日になっています。私たち外国人にとっての影響も少なくなく、当日は商店がほとんど休みになるのだそうで、「阪本さんの場合にはレストランでお酒が飲めなくて、店でもお酒が買えなくなるので困るでしょうね」と聞いていたので、前日には食料などもろもろ買い込んで、兵糧攻めに備えることにしました。実際、大統領選挙のときに同様の苦い経験をしたことがあります。

しかしながらメーデーの本来の趣旨は、禁酒したりホテルに引きこもるこ

とではなく、労働環境の改善について訴え、ともに考えることにあります。
国立天文台のチリ事務所と合同 ALMA 観測所のサンチャゴ中央事務所が置
かれているサンチャゴ市内でも当然集会があるはずで。

実際、中央労働組合 (CUT) によるデモ行進が旧市街で行われるとの情報が、
在チリ日本大使館から安全情報として提供されました。毎年恒例のデモでは
あるものの、破壊活動が行われることも予想されるため、付近に近づかない



メーデー当日のマトウカナ (Matucana) 通り。
突き当りに見えるのが中央駅だが、人通りは
まばらだ(上)。
この通りは平常時はバスや乗用車、歩行者で溢れ
ている(下)。



ようにとの注意喚起つきです。

そこまで言われるとさすがにデモ行進に参加しようとは思いませんが、合
同 ALMA 観測所では 2013 年 8 月に現地雇用のチリ人作業員たちがストライ
キに突入したり、つい先日でも空港のストライキで輸出入の遅れが見込まれる
など、プロジェクト側にとっても現地の雇用の安定は重大な関心事となっ
ています。そこで、作業用の身軽な服に着替えて、ホテルからバスに乗って近
くまで行ってみることにしました。幸いにしてサンチャゴには旧市街を含め
てそれなりに土地勘もあるので、バスが旧市街中心部をかすめて通り抜けよ
うというタイミングで下車し、そこから旧市街の中心部である中央駅
(Estación Central) に向けて南向きに歩くことにしました。

異変にはすぐに気づきました。まず、休日とはいえ、中央駅に通じる大通
りに車の影がほとんどありません。しばらく行くと、交差点にはバイクに
乗った警官たち、そしてはるかかなたにはダークグリーンの装甲車や赤色灯
が見えます。

中央駅に着くと、旧市
街を貫くサンチャゴ随一
の目抜き通りであるオイ
ギンズ (O'Higgins) 通り
がとんでもないことにな
っていました。道を行
きかう装甲車の脇にはた
くさんの石や壊れた椅子
が散乱しており、地面は
びしょびしょに濡れてい
ます。デモ隊と当局との
間で激しい闘争があった
ことを物語っています。



デモ隊が去った後のオイギンズ通りの惨状。
道を走るの装甲車ばかりで、乗用車の姿はない。

片側5車線のこのオイギンズ通りはもちろん、予定されていたデモ行進のコース以外にも主戦場はかなり広がっていたようです。いたるところでバス停が打ち壊され、ちょっとした広場には石やビラが散乱していました。私も取材をするの



荒らされた広場



破壊されたバス停

暴徒化するようではいけません。事前に届け出たデモとはいえ、破壊活動は罰せられますし、何よりも労働者の権利向上に対する共感を得られるはずがないからです。日本のメーデーのようすを見て、日本は平和な国だと思いました。

であればもっときちんとした装備が必要だったのかもしれませんが。私が合流した14:00頃にはだいぶ収束していたようですが、まだ小競り合いが続いていました。私がその場で撮影したデモ隊への放水のようすは私のFacebookにも載せてありますので、興味がある方はご覧ください。

それにしても、年に一度のこの機会に労働者の権利の向上を訴えるのは大事なことです。このように一部の参加者が



破壊されたバス停



ヘルメットだけでなくガスマスクを装着したカメラマンの姿も。

デモ隊と当局の応酬は当日夜にはテレビでも大きく報道されました。CNN Chileでは当局側のハビエラ・ブランコ (Javiera Blanco) 労働大臣と、中央労働組合のバーバラ・フィゲロア (Bárbara Figueroa) 委員長の声明が繰り返し取り上げられていました。2006年にすでに女性のミシェル・バチェレ (Michelle Bachelet) 大統領を選出(2014年に再選出)したチリで、女性の社会進出が着実に進んでいることを端的に示すものでもありました。

おわりに

私たち研究教育職員には裁量労働制が導入されていますが、国際プロジェクト業務にどれだけの自己裁量の余地があるのかは疑問があるところ(実際私が昨夏までJAXAの宇宙科学労働組合にいたときには、宇宙科学研究所では裁量労働制の導入を見合わせていました)。

世に出る華々しい科学成果を支える現場には、あまり知られていないこういった苦労があり、当事者の数が少ないこともあって対応が遅れがちです。このように多様な状況にある現場からの声を拾い上げ、待遇の改善につなげていくのが組合の大きな役割だと思います。